

学 位 請 求 論 文 要 旨

談話における省略現象の日中対照研究
——動詞の行為項の省略を中心に——

2020年1月

城西国際大学大学院 人文科学研究科
比較文化専攻

姜 暁紅

省略は、一つの言語現象であり、特に話し言葉にはよく見られる。しかし、日本語でも中国語でも省略という現象はよく見られるが、省略のしかたには違いがみられる。また、同じ事柄を表現するのに、何を省略するかも日中両言語で異なっているだろうと考える。そこで、筆者は日本語と中国語の談話における省略現象に関して、日中対照研究を行いたいと考えた。

本研究の目的は、行為項の省略に関する日中両言語の言語的特質を明らかにし、さらに日中対照言語学的な分析を行うこと、そして将来、言語の学習、翻訳及び異文化コミュニケーションの促進にも貢献をすることである。

日本語と中国語の対照研究を行うに際して第一に問題となるのが、両言語の構造的相違である。ここで必要になるのは、両言語を同じ条件のもとで比較できる枠組みである。具体的に言えば、省略は文の意味に関わる現象であるため、文が表す内容を対照させられる枠組みが必要なのである。日本語・中国語ともに、動詞述語は対照させやすいと考えるため、本研究の研究対象を動詞述語文における省略現象に絞った。しかし、日中両言語の動詞述語文の省略全般について論ずるのではなく、動詞述語文における省略現象の研究の枠組みとして、動詞述語文の述語項構造を援用し、省略が顕著に表れる動詞の行為項の省略を対象として考察した。

本研究は、動詞に焦点を合わせ、動詞が支配する行為項の省略に関する研究を日中対照言語学的に行うものであるため、分析の対象とする談話資料を日中両言語の類似したもの、具体的には、日本語と中国語の類似した対談番組における談話音声文字化したものを、研究資料とした。また、研究対象をできる限り広範囲のものにした。すなわち、単一の動詞にとどまらず、動詞の可能表現、受身表現及び使役表現も含め、動詞・動詞表現をいくつかのタイプに分類し、それらの項構造及び各行為項の意味役割を詳しく検討した。さらに、省略の条件及び復元可能性に基づき、各種の項構造にあるはずの行為項の欠如を省略と認定したうえで、本研究の談話資料に対しくまなく意味分析を行い、その中における行為項省略に関わる一価動詞、二価動詞、三価動詞を全て抽出した。また、各行為項の省略傾向を動詞の種類別及び行為項の意味役割別に集計した後に、実例分析を通して省略ストラテジーの適用を考察し、省略に関わる各種の動詞の分布、省略された行為項の意味役割別の分布、各種の省略ストラテジーの分布について日中対照分析を行った。日中対照分析をする際、省略傾向の量的な差と、省略ストラテジーの質的な差を考察し、またその差の形成要因、例えば、語や文の意味などの意味上の条件、文型などの文法上の条件、語用論的な条件などを考慮に入れながら考察した。

第1章においては、研究の背景と問題提起を論じたうえで、研究の目的、研究課題、研究資料と研究方法、論文の構成について述べた。

第2章においては本研究の理論的基盤を論じた。まず、省略の定義を概観したうえで、テニエールの結合価理論及び行為項の概念について紹介した。次に、「意味ゲシュタルト」の概念を取り入れ、行為項の省略の認定について論述した。さらに、行為項の意味役割の

定義について論述した。

第3章においては、日本語における省略現象に関する先行研究及び日本語と諸言語における省略の対照研究の分析方法及び研究成果をまとめた。分析の結果、先行研究のほとんどは、統語機能のレベルにおける主語などの省略、格のレベルにおける主格などの省略、情報構造のレベルにおける主題の省略などを論じたものであることがわかった。そして、本研究の立場を、意味役割のレベルにおける行為項の省略という視点から、自然談話より抽出された実例を研究資料として、省略現象の日中対照を検討するということにあると明らかにした。

第4章においては、日中両言語における動詞を文中で表す意味内容により、「動作を表すもの」、「描写を表すもの」、「感情を表すもの」、「移動を表すもの」、「存在を表すもの」の5種類に分け、さらに、伝統的に文法カテゴリーとみなされるヴォイス、すなわち、動詞の「可能表現」、「受身表現」、「使役表現」も加えた。そして、これらの動詞・動詞表現が支配する行為項の意味役割を、「動作主体」、「描写主体」、「感情主体」、「移動主体」、「可能主体」、「存在主体」、「対象」、「相手」、「場所」、「被害者」、「受益者」、「使役主体」の12種類に定めた。さらに、この8種類の動詞・動詞表現を動詞の結合価により、それぞれいくつかの下位分類をした上で、各種類の動詞とその行為項からなる項構造をそれぞれ構築した。全体から見れば、日中両言語における動詞とその行為項からなる項構造は、間接的な受身表現など以外は、ほぼ同様に構築できることが明らかになった。

第5章から第7章においては、行為項省略に関わる一価動詞、二価動詞、三価動詞という動詞の種類別の分布、省略された行為項の意味役割別の分布、各種類の省略ストラテジーの分布に関して、それぞれ日中対照分析を行った。これらの各章の研究のプロセスはほぼ同様である。具体的に言えば、まず、日本語における行為項省略に関する動詞及び省略された行為項のデータを集計したうえで、各行為項の省略ストラテジーに関して、具体的な談話資料を通して例示し、承前省略、啓後省略、文脈省略、文法省略、現場省略という各種類の省略ストラテジーの適用傾向をまとめた。次に、中国語に対して同様な分析を行った。最後に、行為項省略に関わる各種類の動詞、省略された各種類の行為項、各種類の省略ストラテジーをめぐり、量的にかつ質的に日中対照分析を行った。

第8章においては、結合価のいかんを問わず、行為項省略に関わる各種類の動詞の分布、省略された行為項の意味役割別の分布、適用された各種類の省略ストラテジーの分布に関して、日中対照分析を行った。その結論は、以下のとおりである。

まず、行為項省略に関する動詞の異なり語数に関しては、日本語と中国語は、総数・結合価の分布・具体的な動詞種類の分布のいずれにおいても、類似した傾向が見られた。これは、言語の種類が異なるものの、日本語も中国語も、人間同士のコミュニケーションの主要な手段として、動詞を通して構築した世界がほぼ同様であるからだと考える。ただ、日本語の場合は、行為項省略に関わる動詞の受身表現が多く見られる一方、中国語の場合

は、行為項省略に関わる動詞の使役表現が多く見られた。これは、日中両言語、それぞれの言語的特徴に由来するものであると考える。また、数量的には相違が見られながらも、行為項が省略された各種類の動詞の延べ語数の分布においては、日本語でも中国語でも、最も多いものは二価動詞で、最も少ないものは一価動詞であることが明らかになった。

第二に、省略された行為項の意味役割別の分布においても共通点が見られた。日中両言語においては、動作主体と対象という行為項を持つ動詞がそもそも多いため、動作主体の省略が最も多く、次は対象の省略であった。一方、中国語と比べると、日本語においては移動主体の省略の多いという現象が見られた。これは、日本語の文法や語彙に関連付けられることが判明した。具体的には、日本語の場合、移動主体の省略の多さは、「いらっしやる、まいる」など敬語動詞の多用と「～てくる・いく」など移動の方向性を暗示する補助動詞の使用に関連するものと考えられる。

第三に、各種類の行為項省略ストラテジーの分布に関しては、日本語の場合、最もよく利用されているのが文脈省略で、次が承前省略であるのに対し、中国語の場合は、最も多いのが承前省略で、次が文脈省略である。これは、行為項別の集計でも見られた傾向であった。また、日本語における文法省略の多用と中国語における啓後省略の多用も見られた。すなわち、本研究の談話資料における動詞の行為項省略のストラテジーに関して、日本語では「文脈・文法」型という、より暗示的・間接的な省略手法が好まれるが、中国語では「承前・啓後」型という、より明示的・直接的な省略手法が好まれると考えた。なお、現場省略に関しては、行為項の復元について、現場における存在物や話者のジェスチャーなどの要因によりかなりの制限を受けるため、日本語と中国語のいずれにおいても、動作主、対象、場所という、現場で指示されやすい行為項の省略以外には、あまり見られなかった。

本研究は、日本語と中国語の、形式の類似した談話番組における対談各 10 回、計 790 分を文字化して、研究資料とした。今後、談話資料を量的に増加させるか、あるいは別の種類・形式の談話資料を基に調査を続けるならば、動詞のタイプでも行為項の省略ストラテジーの種類でも新たな結果が現れる可能性が残っている。また、行為項の省略の検討にとどまらず、別の要素の省略、例えば、動詞述語自体の省略などを日中対照的に分析することも研究のテーマとなろう。ともに、今後の課題としたい。